HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第11号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2010-12-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73496
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_11.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第11号

No. 11
December, 2010

【特集１】2010年をふりかえって：十大ニュース＆キーワード（流行語）大賞
【特集２】12月22日トリプルワークショップ（地域・主題）レポート
・編集部特派員報告「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」
・参加機関紹介「USAGI：島根県立大学」

【特集1 】2010年をふりかえって(１) 十大ニュース

今年も機関リポジトリ・オープンアクセスの世界ではいろいろな出来事がありました。今回、DRFメーリングリストでよびかけ、今年、どんな出来事が印象深かったのかを投票形式で尋ねてみました。その結果をここに発表し、2010年を振り返ってみたいと思います。ご協力くださった皆さん、ありがとうございました。

（有効票134　★は得票数です）

1 DRF新体制発足（2月） ★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

108機関の参加で再結成。煩悩を脱却し、現在の参加機関数は122です。

2 国立情報学研究所と国公私立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定（10月） ★★★★★★★★★★★★★★★★★★

EJコンソーシアム連携の強化を主眼とした、全5項からなる包括的な協定が成立しました。第2項に「機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築」が挙げられています。

3 『月刊DRF』創刊（2月） ★★★★★★★★★★★★★★★★

本紙読者の皆様ほどこうした投票企画にノッてくださるのでしょうか。キーワードともども応援ありがとうございます。これからも全国のOA,IR担当者とその周囲の皆さんをつなぐ紙面を作っていきたいと思います！

4 国立国会図書館、博士論文のデジタル化へ（6月） ★★★★★★★★★★★★★★

平成3～12 年度提出の約14万論文の著作権処理がはじまりました。
国際的なETDsの相互運用（http://www.ndltd.org/）とも親和していきたいですね。

5 国際オープンアクセス週間に各地でイベント開催（10月） ★★★★★★★★★★★★★

来年のOAWは10月24～30日と決まりました。準備準備！

6 HUSCAP、ノーベル化学賞論文掲載（10月） ★★★★★★★★★★★★

鈴木先生おめでとうございました。Wikipedia「鈴木・宮浦カップリング」などからもリンクがついています。

7 『科学技術基本政策策定の基本方針（案）』（5月） ★★★★★★★★★★★

「Ⅳ. 我が国の科学・技術基礎体力の抜本的強化／4.国際水準の研究環境の形成」の一環として、「機関リポジトリの充実」が施策案として挙げられました。

8 UsrCom　公開（2月） ★★★★★★★★★★

機関リポジトリの“教育用モード”。コミュニティサイト併設の体験サーバです。

9 シュプリンガーがSpringerOpenを発表（6月） ★★★★★★★

自然科学分野の新たなOAジャーナルシリーズ（http://www.springeropen.com/）。最初の15誌が2011年の早い時期に創刊される予定です。

10 DRF技術サポートワーキング・グループがGoogle Scholarチームと組んで国内の機関リポジトリの可視性向上を支援（10月） ★★★★★

あなたのIRはGoogle Scholar対応？　まだの方は→ [drf:2054] Google Scholar に採録されるために　をどうぞ。

この他にも、junii2ガイドライン公開（2月）、第3期CSIスタート（4月）、 SCPJリニューアル（4月）、提言『学術誌問題の解決に向けて：「包括的学術誌コンソーシアム」の創設』（日本学術会議：8月）、ZSプロジェクトがIFLAサテライトカンファレンスに出展（8月）、主題別の取り組みの展開（医学、農学、遺跡、ARMS）など、いろいろあった一年でしたね。
来年もたくさんよいニュースを作り出していきましょう！

→第4面　ことしのキーワード（流行語）大賞に続く

【特集2】12月22日トリプルワークショップ（主題・地域）レポート

12月22日には各地で3つのワークショップが同時開催されました。そのレポートです。

DRF地域ワークショップ九州地区　DRF/ShaRe-Kyushu　－九州大学－

九州大学　有川総長

【機関リポジトリの活用：ユーザの視点から】IRに登録をはじめて今は大ファン。世界中からコンタクトがあり、シンポジウムの招聘や問い合わせがあり驚くべき反応。IRの影響とメリットを体感をしています。IRのこれからの発展に期待します！
（W.ミヒェル：九州大学名誉教授）

【リポジトリの費用対効果】
IRの更なる導入・普及を考えるにあたって一度その費用対効果を分析してみよう。IRは恒久的なデータ蓄積が目標なのだから、長期的に経費が削減されるような動きが必要になるだろう。
（伊東栄典：九州大学准教授）

【単独IRのすすめ】小規模で単独IRの良さ。苦労もたくさん、けれどもそれ以上に得ることもたくさん。担当者としていろいろなつながりを感じる。これからも新たな可能性にチャレンジ。（徳安由希：九州工業大学）

【共用リポジトリサービスについて】IR導入のためにNIIが提供するシステム環境「共用リポジトリ」の全貌。今後5年間で200機関の新規構築を目標に。いろいろな事業・機関と協力をして力強く取り組んでいきたい。まずは構築例をつくりたい！実証実験参加機関募集中です。
（小林廉直：国立情報学研究所）

【IRと研究者情報の連携】九州大学研究者情報システムは高いSEO効果をもっており、現在約7万件の論文が登録されている。2006年からIRと連携をはじめたが、リポジトリのコンテンツ数は現在15,000件、もっとIRとつながるよう双方向から改善をつづけていきたい。
（森雅生：九州大学助教）

【共同リポジトリ】中小規模機関のIR導入の障壁をやる気と地域連携で除去し、課題も皆で取り組み、進んできた共同リポジトリ。IRのコミュニティ活動は図書館活動全体の活性化につながる。
（森保信吾：広島工業大学）

【リポジトリの有効性分析】著者（研究者）にとっての登録のメリットがあれば、必ず登録する人は増える。有用な情報を著者にフィードバック。また「閲覧者」の気持ちも考え、IRならではの付加価値も必要と思う。
（馬場謙介：九州大学准教授）

DRF/ShaRe-Kyushuは、朝からあいにくの強い雨となった福岡でそれに負けない強い意思とともにお集まりいただいた50名の参加者にて元気に開催されました。開会の挨拶には、九州大学総長、有川先生もかけつけて下さり、国内における機関リポジトリ・オープンアクセスに関する動きと、国の科学技術基本計画や文科省の学術情報基盤作業部会の最新の情報をプレゼンテーションされるとともに、機関リポジトリの推進と大学図書館の発展を説かれました。各々多彩な講演と意見交換の後、附属図書館長、川本先生より人文科学の研究者の視点からリポジトリについて学ぶものがあったとご意見をいただき、大きな拍手とともに閉会となりました。

九州大学　川本館長

DRF地域ワークショップ（東京地区）DRF-TOKYO　－慶應義塾大学－

「首都圏，東京で地域ワークショップを！」というDRF内の声が原動力となって開催されたワークショップでした。私立大学をターゲットとして企画を立てました。参加は総勢61名（講師、実行委員を含む）、大半は私学関係者でした。講演後のグループ討議、全体討議も活発な質問・意見の応酬がされました。参加された方々の様子から、首都圏の私大でもリポジトリの裾野が広がっていく可能性を感じました。種はすでに蒔かれ発芽直前です。そこにいかに水と肥料を提供するかが今後の課題でしょう。

■第1セッション：これからリポジトリを始めるために（事例報告）

東京家政大学機関リポジトリの公開までと今後の課題　鈴木恵津子（東京家政大学図書館）
→　大学の校祖と開学当初学長の著作物をリポジトリで公開するといった、私学ならではのリポジトリ構築のきっかけと学内での合意形成過程を中心に報告いただきました。

私たちがリポジトリを構築した理由(わけ)～これまでの歩みとこれからの課題～　菊池美紀（聖学院大学総合図書館）
→　小規模な私学でもリポジトリに登録するコンテンツはある、ということから始まったリポジトリ構築と学内の連携体制を紹介いただきました。

■第2セッション：少し疲れを感じたリポジトリ担当者を元気にするために

私立大学でもできる、私立大学だからできる　外崎みゆき（関東学院大学図書館）　→　人員、予算ともに国立以上に厳しい私学でいかにして持続的成長を図るか。豊富な経験からお話しいただきました。

■第3セッション：利用の側面からリポジトリを考える

慶應での経験からリポジトリを考える　入江伸（慶應義塾大学メディアセンター）
→　私大には国大とは異なるリポジトリ構築の動機と事情がある。どれが正しいということではなく、いろいろな動機があっていい、とのお話には納得。

公共図書館におけるリポジトリの利用　石原眞理（神奈川県立川崎図書館）
→　公共図書館ではリポジトリのコンテンツがどのように使われているかについての事例報告。「公共図書館も使っているので機関リポジトリ担当者は頑張って欲しいです。応援してます」とのエールをいただきました。

■第4セッション：学術情報の発信

ニューロインフォマティクスの展開と展望　臼井支朗（理化学研究所脳科学総合研究センター）
→　知的生産物をどのようにして蓄積し共有のものとしていくかという観点からXooNIpsを作ったという開発の事情を解説いただきました。

XooNIpsの詳細と次世代XooNIps　奥村嘉宏（理化学研究所脳科学総合研究センター）
→　リポジトリソフトウエアとして使用されているXooNIpsの特徴を解説。現在、XooNIpsによって12のリポジトリが構築されています。

DRF主題ワークショップ（芸術・音楽・体育）DRF-ARMS　－東京藝術大学－

DRF-ARMS（ARt+Music+Sports）では「論文以外の学術成果を発信する」をテーマに画像・音声・動画ファイルを効果的に発信するための方法や課題を考えました。参加者数は45人（講師スタッフ含む）、講演では、非言語データである画像・音声・動画ファイルの利用のための言語によるタグ付与の重要性、システム的にはメタデータ項目の設定や典拠コントロールに関する課題、教員からは動画の利用状況や実例、コンテンツ公開についての主題分野特有の問題があることなどが示されました。特に教員の生の声には多くの反響が寄せられ、アンケートでは継続的な意見交換など今後の展開を期待するコメントが多く見られました。

【画像ファイルの学術成果を効率的に発信する試み】
積極的に活動している中小規模のリポジトリが正当に評価される基準が必要。
（森一郎：千葉大学附属図書館）

【音楽の成果を機関リポジトリに載せる問題点】
論文とは事情を異にする音楽の経済的な問題を整理・解決する必要がある。
（黒坂俊昭：相愛大学音楽学部教授）

全体進行：赤澤久弥
（奈良教育大学学術情報研究センター図書館）

開会挨拶：田口榮一
（東京藝術大学附属図書館長）

意見交換会
メタデータにおける実物とデジタルイメージとの関係や、演奏や美術作品など商業的価値の高い情報の公開について、意見が交換されました。

【機関リポジトリにおける美術・音楽作品のメタデータ】
リポジトリに美術作品を登録するには、メタデータ項目の検討が必要。
（大田原章雄：東京藝術大学附属図書館）

【競技スポーツにおける動画の活用と課題】
競技力向上に動画は不可欠。 動画を発信する環境は整いつつあるが、体制面などに壁が存在する。
（和田 智仁：鹿屋体育大学スポーツ情報センター長）

編集部特派員報告　- 12月10日（金）東京大学鉄門記念講堂　国立情報学研究所 国立大学図書館協会 共催シンポジウム
大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える：ハーバード大学，レディング大学，北海道大学を事例に

全体プログラム
- 「オープンアクセス序論：概況報告」尾城孝一（東京大学附属図書館情報管理課長）
- 講演1「The Harvard Open-Access Policies」Stuart M Shieber (Director, Office for Scholarly Communication, Harvard University)
- 講演2「Open Access in the UK: University of Reading and Beyond」Andrew A. Adams　（明治大学大学院経営学研究科特任教授）
- 講演3「北海道大学の機関リポジトリの状況について」山本和雄（北海道大学附属図書館学術システム課長）
- 講演4「海外におけるオープンアクセス化に関する政策論議の展開（米国を中心に）」遠藤悟（東京工業大学大学マネジメントセンター教授）
- 「誰のために、何をオープンアクセスにするのかについての一二のコメント」加藤憲二（静岡大学附属図書館長）
- パネルディスカッション　司会：安達淳（国立情報学研究所学術基盤推進部長・教授）

- OAは現在の商業出版社主導の学術情報流通システムに変革をもたらすまでには至っておらず、逆に、商業出版社はOAに適応し収益システムに組み込みつつある状況（尾城氏）
- 状況改善への短期的なアプローチとして、大学のOA義務化方針が有効。しかし根本的な問題である学術出版市場の機能不全の解決に向けた、さらに長期的なアプローチも必要（シーバー氏）
- 誰が書き誰が読む論文のOAなのかを考えれば、研究者へのアプローチが最も重要（山本氏）

シーバー氏からは、長期的なアプローチの手法として「COPE（Compact for Open Access Publishing Equity）」（http://www.oacompact.org/） が紹介されました。 著者負担コストを大学が財政的に支えることによって、OAジャーナルを活性化し、購読コストでなく投稿コストの部分で市場メカニズムを機能させよう、との構想です。BRII（本誌第4号を見てね）のカリフォルニア大学バークレイ校も同協定に加盟しています。

パネルディスカッションでは、研究者への意識喚起の難しさ、国の関わり、20年後の学術コミュニケーションはどのようになっているか、といった議論がされました。「現在の困難からどう脱却するかではなく、めざす地点にどう到達すべきかを考えるべき」（アダムス氏）との発言が印象的でした。

【特集1】2010年をふりかえって(2)　キーワード（流行語）大賞

十大ニュースと同じ要領で、今年、印象に残った言葉をみなさんに投票していただきました。有効票119　★は得票数です。

大賞　月刊DRF　★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

キーワードも月刊DRF！ありがとうございました。しかし、この編集部の自転車操業…いつまで「月刊」が続くのか、とご心配のみなさま、大丈夫ですがんばります。（影の声「いざとなったら合併号がある。」）

準大賞　ひたひた (Sliming In)　★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

こちらのほうが『月刊DRF』よりもキーワードらしいかもしれませんね。前田さん（大阪大学）の、機関リポジトリを通じた我が国のOA思潮の広がりのさまを形容した「ひたひたと地味に研究者に浸透していく」という言葉から、第8回ベルリン宣言記念OA会議での口頭発表の中心コンセプトになりました。英訳は土屋アドバイザー（千葉大学文学部）です。

頂いたメッセージから

- **「リポジトリの中の人」**でしょうか。　皆様本当に親切な方々です。感謝。DRFに参加して、勉強させていただいて、一気に世界が広がりました。今後も、どうぞ宜しくお願いいたします。
  →研究者の方々、学外同業者、海外同業者……、機関リポジトリに携わると、視界がぱっと開けるように、本当に人的交流のネットワークが広がりますね。
- まさに実態が見えないままに見え隠れしていたキーワード**「クラウド」**がありましたね。徐々に姿が見えてきましたが……
  →新規設置館にとっても既設館にとっても、機関リポジトリを設置・運営しやすいインフラが整っていくといいですね。
- **UsrCom**を使ったワークショップの開催は印象深いです。
  →目録講習会と同じく、初任者にとって直に触れられるというのは大きいですね。
- 2010年キーワードは、**「偽りの義務化と着実なひたひた」**かな。
  →機関オープンアクセス方針をテーマとした催しがいくつかありました。制度が定まったとしても、その制度に実効性を与えるにはアドヴォカシー活動の重要性は変わらないようですね。

その他、こんなキーワードもありましたよ！

義務化・mandate・**△スタンド**（OAWで大活躍）・**パブコメ**・**AAA**（アンドリューAアダムス氏）・**SCOAP3**
ORCID（研究者名寄せ法人）・**メリットは作り出すものだ**（DRF6参照）・**ゆいまーる**（沖縄の共同体。まるでDRF！）

DRF参加機関紹介

USAGI：島根県立大学

University of Shimane Academic and Global Institution repository

うさマーク

グッズもつくりました

Q1. 担当課担当係と運営体制をおしえてください。

浜田キャンパス図書情報課司書1名（他業務と兼任）が総括及びシステム・サーバ管理を行い、松江・出雲両キャンパス図書館司書各1名（他業務と兼任）がそれぞれのキャンパスについて担当しています。

Q2. 導入システムは何ですか？

http://sir-u.shimane.ac.jp/

インフォコム（株）の「InfoLib」です。

Q3. 公開時の苦労話や秘蔵話、他機関と違った活動などをぜひ。

まず、本学では担当者が他業務と兼任であること、また教員・図書館どちらが登録する場合にも簡単な操作であることをポイントに、労力がかからないシステムを選定するべく、仕様作成をしました。本学のような小規模大学では、IRも大切ですが、他の業務への影響を最小限にする必要があり、ベストな選択であったと思っています。構築については、学長先生の鶴の一声があった関係で、スムーズに事が運びました。初期コンテンツは、紀要論文約1,110点です。

浜田キャンパスについては、国際短期大学部時代の紀要学術雑誌論文と学術雑誌掲載論文の登録に向けた準備を進めているところです。

Q4. USAGIのチャームポイントは？（ここが気に入ってるといったところを）

愛称を募集したところ、かわいいキャラクターまでついてきまして、見た目のチャームポイントになっています。内容的には、IR内のデータベースを使って教員業績DBを構築したこと、本学が「北東アジア研究」を主要研究課題としていることから検索インターフェースを中国語・韓国語・ロシア語対応としたところがポイントです。

Q5. DRFに期待することは何ですか？

本学のような規模の小さな大学図書館を、もっと勧誘してあげてください。IRを作りたいと思っていても、人・技術・金銭面から投げている大学は多いはず。学術情報の流通を変える！、という大いなる目標のため、未構築の大学からどれだけ声が上がるかがカギだと思います。DRFは、そんな大学へ救いの手を差し伸べてくれる重要な組織として、今後も活動をしていただきたいです。

次号予告

【特集1】年始特集

運営委員新年挨拶（DRF運営委員新年の抱負）＆　新春レディース座談会（コンテンツ収集は肉食系で攻めるか否か？）

【特集2】参加レポート

「機関リポジトリのアクセス数をいかに数えるか？」「シンポジウム学術情報流通の改革を目指して」ほか

DRF仙台で初詣に行き、月刊DRFで仕事納めの一年でした。来年もよい出会いがありますように。来年もどうぞよろしくお願いします。(FOZ)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkandrf@gmail.com

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/　　月刊DRF11号　平成22年12月28日発行　デジタルリポジトリ連合